

# 月光の影（一）

高岡 啓次郎

月が死神から絵を買った  
不穏なその夜  
憐れ 月は狂っている

その頃 暗い胸の中で  
わたしは ひとつの市を開く  
音楽もなく  
並ぶのは影の店ばかり  
ロルカ

## 一章

三階の窓から庭を見下ろしていた。冬の雲間から月が半分ほど顔を出している。朝からつとめて心を静め、考え続けてきたが、引き寄せた理性は内奥でくすぶる野心の火種のだった。

の長い指を差し込んでかゆそうに掻きながら右手で楽譜に印をつけては鍵盤をたたいていた。

民子は、将来息子が音楽に係わる仕事につくことを望んでいて、何かにつけてピアノの演奏技術を習得させようとしたが、本人にはたまらなく窮屈に思われた。だがここ数年、民子はその種のことをあまりいわなくなつた。常之が主任指揮者と口論して楽団をやめ、仕事もせずに家でピアノばかり弾いていることにうんざりとした表情を浮かべるのだった。

民子は朝早くから佐鳴湖畔にある総菜屋に働きに行くようになった。常之はときおり別の楽団の応援や私立高校でピアノの臨時講師をしていたが収入は微々たるものだった。慎一郎の関心は音楽には向かわなかつたが、佐鳴台で育つた彼の耳には父親が奏するピアノの調べがいやがうえにも残っていた。とりわけ頻繁に耳の奥にながれてくるのはベートーベンの月光だった。この曲が醸し出す何とも言えない冷ややかで透明な旋律が脳裏に深く刻まれた。その曲は当初、民子のリクエストに応えるようにして繰り返し弾いていた曲だった。信販会社でOLをしていた民子が常之の出演した札幌のコンサートで初めて聴いたのがこの曲だったという。

慎一郎の家は佐鳴湖からすぐの所にあつた。二階の勉強部屋から見える湖は三歳から一八歳までの記憶の背景に常

を消しえなかつた。

眼下に雪を乗せた日本庭園がある。贅をこらして造らせた庭には大きな岩が幾つか置かれ、深い闇を作っている。そのとき、結城慎一郎は自分でも分かるほど不気味な笑いを浮かべていた。垂れ下がった髪の間からのぞく眼光が、薄っすらとガラスに映つたとき、ふと何かに気づいたように穏やかな顔になつた。

庭の向こうには多摩川の土手が広がり、真つ黒い川面にときおり光が点滅して揺らぐ。光と闇の帯が遠くまで伸びている。慎一郎は思っていた。自分が知り得るものの中で月光の影ほど暗いものはない。その陰影を見つめながら、幼かつた日のことを思いだしていた。佐鳴湖でとつた蟹やタニシを抱えて家に帰ると、父の結城常之はいつものようにピアノを弾いていた。

「さつさと足を洗いなさい！」

母の民子が少し苛ついた顔をして風呂場に通じる廊下に新聞紙をしいた。

「ここを歩くのよ。掃除が大変なんだから」

丸刈りにした頭をかきながら、慎一郎は泥だらけの手足を泥棒みたいに抜き足差し足で浴室に入った。民子が前かけ姿で腕組みしながら目をつりあげてにらんでいる。浜松K小学校三年の慎一郎はすでに母親の肩の高さを越えていた。常之は無精ひげをはやし、肩までとどく髪の毛に左手

に存在していた。日中は何の変哲もない小さな湖だが、夜になると姿が一変する。辺りは道も疎林も闇にとけて、一帯が地獄みたいに黒々と横たわる淵となり、見たこともない恐ろしい妖怪が物陰にひそんでいると思わせる不気味さがあつた。

湖面は月夜の下でとてつもなく暗く怪しげに佇んでいた。一陣の風が吹くと、柳の枝が黒いシルエツトとなつて、夜の湖に差し込む冷たい月光の前にそよぐ。そんなとき、暗黒の湖面が鋭い光の矢が刺さつたみたいにゆれる。慎一郎が目をとらすと、大きな魚が水から鈍い音を発して飛び出すのを見ることもあつた。

この小さな湖は、やがて汚染度日本一の悪名を与えられるが、そのころは水もきれいで汽水生物の宝庫だった。海老や蟹が無数にいたし、魚の種類も多く食用にかなう大魚が生息していた。めつたに散歩にも出ない常之が慎一郎に言ったことがある。

「こないだ、でかい魚がボートの底を突き破つて入つてきたぞうだ」

「そんな、父さん嘘でしょう？」

「ほんとうらしいぞ、漁師が言っていたのだから間違いない。底板が腐りかけていたんだらう。なんでも一メートル近いボラだとき」

「すごいね、ぼく見たかつたな」

常之は慎一郎が生き物の話をしたとき、他のどんなときより目を輝かせるのを知っていたからか、気がすすまない息子を無理にピアノの前に座らせようとはせず自分の好きなことをやりなさいと口癖のように話していた。

中学では友だちの多くがサッカーや野球に熱中していた。スポーツで名を知られた学校だったから、そうすることが健全な成長の理想のように言われた。別のタイプの友人たちはラジオや無線機を組み立てたり、ラジコンで車やグライダーを動かすことに熱中していた。浜松は車産業の拠点であり、テレビの発明者である高柳健次郎を輩出した土地としてその種の部活にも根強い人気があった。

しかし慎一郎は違っていた。スポーツにも無線機にも何ら関心を示さず、魚や虫などの生態に幼いころにも増して興味を膨らませていた。知識欲を満たすために、部員が四人しかいない生物クラブに所属した。クラスメートがそんな慎一郎をからかった。

「なんでそんな地味なところに入るんだい？ 汚い恰好で田んぼの中を歩くというぞ。かっこ悪いだろう。おまえは背が高いからバスケットでもやったほうが絶対女子にもてるさ」

慎一郎はきりつとした眉を動かして苦笑いするだけだった。友人たちの忠告にはお構いなしで生物の研究にのめりこみ、虫だらけの草原や腐った匂いにする古池に足を突っ

込んで泥まみれになっていた。

慎一郎の成長に大きな影響をもたらす別の点は、文学への傾倒と北への憧憬だった。それは多分に母親の影響に違いなかった。札幌出身の民子は、浜松と札幌の二つの同人誌に詩や随筆を発表していたので、家にはしばしば仲間が出入りしていた。慎一郎が書いた作文を民子がみんなの前で披露したことがある。それは消防士の一日をレポートしたものだだったが、全員に大げさすぎるほど褒められたことが大きな励みになった。

札幌円山の坂には民子の実家があり、むかし拓殖銀行の役員をしていた祖父が花の好きな小柄な祖母とひっそりと暮らしていた。学校が長期の休みになると、慎一郎はよく母親に連れられて北海道に行った。

そのころ父の常之はピアノリストとして大成する夢をあきらめ、資格をとって地元にある楽器メーカーの専属調律師として勤めだしていた。安定した収入が得られるようになり、その面での民子の不満はなくなつたが、常之が家にいる時間が極端に少なくなつたことに不満をもちやすことがあつた。夫婦のあいだに慎一郎には分からない冷え冷えとした雰囲気は漂いだしていた。

民子は理由をつけては、しばしば札幌に帰った。その地の同人誌仲間たちと出かけるときに慎一郎もついていく。北大のキャンパスや藻岩山のふもとで母たちが集まってい

るとき、慎一郎は自由気ままに辺りを散策して歩く。それが楽しくて時間がたつのも忘れた。

そうした自然ななりゆきで北への憧れを募らせた。やがて地元の高校からだ一人だけ、北海道大学をめざし見事に合格した。慎一郎は祖父の家から通うことになった。ここでは植物や生物の生態を専門に学び、あわせて気象や環境学も修めた。

大学二年のときに浜松で常之が自動車事故で亡くなった。寺島町にある小さな会場で通夜がなされたとき、常之の兄弟たちが、明日の葬儀のとき会場にながす曲に故人が好きだった月光をかけてはどうかと言ったとき、どういふわけか民子は激しく反対した。誰もがその態度をいぶかしげに見ていたが民子は理由を言わなかった。

慎一郎がその事情を知つたのは葬儀のあとだった。会葬者のほとんどが引き払ってから民子は姉に泣きながら話していた。

「あの人には私の他に好きな人がいたのよ。前にその人にあてた手紙を見たことがあるの。浮気するなら分らないようにしてほしかった。どじな人よ。切手も貼らずに出したものだから戻ってきたの。問いつめたらあつさり認めた」

「何が書いてあつたの？」

「歯が浮くような言葉の羅列よ。誕生日を祝福するメッセージに甘つたるい詩が添えられていて、また君が好きな月

光を弾いてあげると結んでいたわ。うちで弾くのと同じように愛人の家でも弾いていたのよ。いつから付き合っていたのかと訊くと三年になると答えた。私ほんと頭にきた」「そんなに長く？ 呆れたわね」

「実際はもつと長かつたかもしれない。だから少なくとも三年間、夫が弾く月光はあの女のためだったのかと思うと無性に腹がたつてしまうのよ」

民子は隣の部屋に息子がいるのにもかかわらずまけた。常之の死後、慎一郎は学業を諦めようかと思つたが、祖父が卒業まで頑張り援助してくれたおかげで、かろうじて辞めずにすんだ。

在学中は教授たちが下を巻くほどの優れた論文を書いたトンボの羽と飛行に関するものや、蠅の脳に関する研究は能力の非凡さを証明した。やがて卒業した慎一郎は、大学院をへて同じ大学に非常勤講師として迎えられ、実績を積んだ数年後には助教授になることができた。

しかし、優しかった祖父父母は相次いで倒れ、孫の雄姿を知らないまま世を去つた。教授の娘と、すすめられるままに見合いをして結婚したのはそのころだった。

妻の咲江は小鼻がふくらんだアグラ鼻であることを我慢すれば概してととのつた顔立ちの女だった。小柄だが色がぬけるように白く、体型には女性的な魅力があふれていた。ただ、大きな眼の中にある黒目の部分が極端に小さい、俗

にいう三白眼だったので、機嫌をそこねたときは怖いほどに白目がむきだしになることがある。

咲江は代々が教授か医者という家柄の娘のせいか、慎一郎が適わないほど社会的な知識や教養があり、読んだ書物の数は半端な量ではないようだった。本人も十分それを自覚していて、いったん誰かと言ひ合いになると、けつして負けない押し強さがあった。

気位が高かった咲江は夫と暮らすようになった官舎に自分の両親を含めて人を招くのを嫌がった。恥ずかしいというのが理由だった。そこは十分の広さがあり清潔な建物だったが、豪邸から移り住んだ咲江にとつてはごみ溜めみたいな家に見えたのかもしれない。浜松から慎一郎の母親が遊びにきたときは市内のホテルに泊まらせ、家に連れてこないようにしむけた。そんな咲江と民子との折り合いは最後まで悪いままだった。

結城慎一郎が、学術的な論文以外にもエッセイや小説を書くようになったのは三十歳の半ばを過ぎたころだった。

数年後に森の自然や野鳥に関するリアルな記述と、そこにまつわる人間模様を描いて中央の文学賞をとった。それをきっかけに作家としても名を知られるようになったわけだが、同じころ、大学時代に同期だった村上嘉門という友人が著名な文学賞をとり、二人はライバルとして周りから見

られるようになっていた。

結城慎一郎は若くしてマルチな才能をもつ教授といわれるようになった。背が高く、秀麗な額をもち、鼻筋が通った顔立ちにはメガネが良く似合っていた。  
「結城先生って素敵よね。わたし先生の授業を追っかけてるの」

そんなことをいう生徒も少なくなかった。父親はピアニストとしてとうとう芽が出なかったが、深い眼差しをたたえた顔立ちには芸術家が醸し出す独特の陰影があった。このころの結城は晩年の父親とそっくりの容貌になっていた。額にグレーの髪が少し垂れ、涼しげな目もとをのぞかせた感じは女生徒が憧れる紳士そのものだった。

やがてペン一本でやってゆく自信に支えられ、周りの反対を押し切って大学を離れた。妻の父親が教授を退任したあと移り住んでいた太田区に土地をさがし、多摩川沿いの家を建て、そこを拠点にして執筆活動に精を出した。しかし書くことだけで生活するには十分の収入とはいえず、依頼される講演やセミナーでの講師の仕事を引き受けるようになった。

だが、時が過ぎるにつれて、講演やそれに類する活動が多くなりすぎて、肝心の作家として優れた作品を生み出すことからは遠ざかる傾向にあった。結城の心に焦りが芽生えはじめた。そのころ同期の村上は流行作家として次々と

作品を発表していた。

ワープロの前で書きかけの原稿をにらみつけるが、続きが書けない日々が続いた。結城は自身の才能に限界を感じはじめていた。若かったときに持っていた、泉が岩間からほとぼしり出るような自由でエネルギーな感覚が最近ほみなぎってこないのだった。

もう一度あのころのように、寝る時間も惜しんで書きまくっていた情熱が湧いてこないものか。そんなことを思いながら、一年先まで埋まっている講演や対談などのスケジュールに否応なく流される日々を送っていた。

突き上げてくる感いや焦燥感。空回りする思考。そんなとき、きまってる耳もとにつきまとう音がある。長い年月が過ぎていのに、父親が弾いてくれたあのメロディがしばしば思い出されるのだった。

多摩川沿いにいるときも、地方で仕事をしているときも、明るく月の出る夜にはとりわけ鮮明に聴こえてくる。その調べが心地よいものとして甦ることはまれで、まとわりつく蚊の羽音のように耳障りに聞こえることが多く、きまってるあとかから頭痛が残った。

## 二章

教授を辞めて数年が過ぎた秋の終わりころ、結城は北海

道夕張郡の長沼にいた。そこで『有機農法の未来と文化』という題で二時間の話をすることになった。地元の農家や農協の職員、町議員らが百人ほど集まり、まずまずの成功といえるものだった。講演が終わってから、彼の運命を変えることになる一人の男が控え室を訪ねて来た。年のころは三十歳くらいだろうか。  
「先生、お久しぶりです」  
青年は骨ばった手を高さのある肩から緊張した姿勢で差し出した。

はてどなただったかな——。  
握手をしながら結城は考えた。どこかで見覚えがあるのだから思い出せなかった。青年は蒼黒い土のような顔色で皮膚には艶がなかった。髪の毛もその年齢にしてはかなり少なく、油っけのないパサパサした感じは安売りの刷毛みただった。身長は結城よりさらに高く、頬がこけている。全体としてどこか具合が悪そうだったが、その眼差しは深い泉のように澄んでいた。

青年は恥じらいをこめた笑顔をうかべ「大学時代お世話になった高梨です。高梨春樹です」といった。  
少し考えて結城は思い出した。

「ああ君だったのか……確かに高梨君だ。あれから何年になるだろう」  
「卒業してちょうど十年を過ぎました」

「もうそんなになるのか。それで君はいま長沼に住んでいるの」

「はい、郊外で細々と酪農をやっています。まだ食べていくのがやっとですが」

「そうだろうな、地道な努力がいるよね。でもこの土地は気候が安定しているから魅力的なものを作れば将来性があるんじゃないのかな」

「はいそう思います。北海道の農村への観光客も以前より増えてまして、乳製品の需要が回復しつつあります」

「そうか、頑張りたまえよ」

結城の激励にうなずいてから、高梨は小脇に抱えていた鞆から大きな紙袋を出し、遠慮がちにいった。

「実はお願いがあつてまいりました」

「ほう、何かな？」

「僕は作家としての先生にずっと憧れていました。それでいつも、牛の世話が終わった後に自分なりにとりとめもないことを書いていたんです。これがそうなのですが、結城先生に読んでいただければ嬉しいと思います」

高梨は紐で閉じた原稿用紙が入った大封筒の口を開いた。結城は覗き込みながら秀麗な表情を崩さなかった。

「ほう……君がものを書いていたとはねえ。随筆かな」

「エッセイと小説を自分なりの手法で書きました」

「かなり書いたの」

「たいした量ではありません、ちゃんと数えてはいませんが三百枚前後の小説は二十篇ほどあります」

「そんなにたくさんかい、すごいじゃないか。君のように朝早くから夜寝るまで家畜の世話をしている人が、よく時間を作って書いたねえ」

「不思議と、書いていると体の疲れが取れていったのです。単調な仕事をしているときに浮かんたことを帰ってから気のおもむくままに書きました」

「どうやって勉強したのかね？」

「独学です。僕は世間には疎いですし、中央の文芸誌なども読みません。もっぱら自分の好きなものを気の向くままに読んでいただけです。文体なども自分勝手なものだと思います。先生がお読みになつたら幼稚だと呆れてしまうかもしれません」

そのとき、ドア口から地元の主催者が声をかけてきた。

「先生お時間ですので、そろそろ参りますか」

その日宿泊することになっているホテルに案内するために向かえに来たのだった。結城は時計を見ながら、

「もう迎えが来たか、ちよつと車を待たせておいてくれなにか」

といって通路に出ながらそのまま高梨と話を続けた。少しして結城が車に乗り込んだとき、手にはかつての教え子が書いた原稿の入った分厚い封筒をふたつ抱えていた。

ため息が出た。各地を回っていると、そうした依頼はとどきある。忙しさを理由に断ることが多いのが正直なところだった。高梨青年から原稿を渡されたときは、いつもと同じように内心あまり嬉しくはなかった。つまらない小説を読まされて貴重な時間を奪われるのは正直いつて疲れる。だが、かつての教え子でもあることだし無下に断るわけにもいかず一応は受け取ったのだった。

その日の夜、札幌のホテルで夕食を済ませ、地方の新聞社から依頼されていたコラムを書いたあととはとりたててすることがなかった。明日の倶知安での講演も今日と同じ話をすればいい。変えるところといえば、せいぜい最初の挨拶や導入部にふれる地域の数字ぐらいなのだ。

結城は何かを書くための取材ノートをめくってはすぐにそれを閉じた。時間はある。だが、そうかといって自分の作品を書くエネルギーも情熱も湧いてこなかった。小説講座で斬新な想像力や他人にまねのできない切り口について教えていても自分にはそうしたものが枯渇している気がした。

同じころデビューした作家たちの、はなばなしの活躍に妻に皮肉をこめて聞かされるときは、はらわたが煮えくり返るほど怒りを覚えることがあり、いつそ作家などやめてしまおうかと思つたことは何度もある。そうはいっても今さら大学に戻れるほどその世界も甘くない。

結城は力なく息を吹き、ベッドサイドの鏡に映つた自分を見つめた。最近はずつとするほど死んだ父親に似ている気がする。一流のピアニストを目指しながら挫折し、一時精神を病んでいたこともある。音楽家として芽が出ないまま若くして世を去つた結城常之が自分の中にいるように思えた。

瞳の焦点をぼかしてわざと父親をあぶりだしてみる。けつして幸福そうに見えなかった父。母の要望にこたえながら月光を弾き、同じ曲を愛人の家でも奏でていたうらはらな父。結城は鏡に反映された自分の顔に現れた過去の亡霊に想いをはせ、他人には解りえない疲れをひしひしと感じとっていた。

気分を変えるために枕もとのパネルボタンを操作してBGMを入れた。クラシックを聴く気にもならず、にぎやかなポップスも気分になくわれない。古いアメリカのパラードがかかるチャンネルに合わせた。ナットキングコールのモノリザに続いてアリペデルチローマがながれたころは少し気分が落ち着いてきた。

そのときふと、夕方控え室を訪ねてきた教え子のことを考えた。高梨という青年は目だつて背が高く、真面目でよく勉強のできる学生だった。無口だが気が優しいのか、結城が教材を教室から持ち運ぶときなどには、頼みもしないのに手伝ってくれたことが何度かある。それも自然にさり

げなくできる若者だった。

しかし、今日久しぶりに会ったときは正直いつて驚いた。それにしても変わったものだ。あのやつれ方はどうしたのだらう。そう思いながらベッドに寝転び、託された原稿を何枚か読み始めた。最初に目を通したのは『さざなみ』と題する小説だった。

読み始めてすぐ、冒頭の部分から結城は衝撃を受けた。思わず起き上り、座りなおしてスタンドを明るくした。急に喉に渴きを感じるほど突き上げてくる驚きを隠せなかった。

「これはすごい」

思わず口になし、ペットボトルの水を飲んでメガネをかけた。書き出しからまもなく、主人公が遺書を書く場面が出てきたが、そこには人間の深層心理が現実に表現されていた。結城は夜がふけるのも忘れ、三百枚の原稿をいつきに読んだ。

主人公がふとしたことから犯した過ちからくる良心の責めに耐え切れず死を覚悟して深い森に入り込んで行くくだりと、見つかった遺体の手が握り締めていた一片の貝殻の描写では落涙を止めることができなかつた。

「これは傑作だ。この感受性は並みのものではない。一流の作家を彷彿とさせる何かをこの青年は持っている」

結城は深い感動を覚えたが、同時に激しい嫉妬を感じた。

それと同時に、それらを自分だけのものにしていく。それと同時になつた。

やがて長い間、線路の枕木みたいに変わらなかつた結城慎一郎の、どちらかといえば生真面目すぎる学術書のような文体が変わつていった。その変わり方はかなり唐突なもので批評家たちを驚かせ、話題を呼んだ。そのことは、

「結城慎一郎氏の文学的覚醒」として著名な文芸誌にさえ取り上げられた。

### 三章

開け放たれた三階の窓から柳の青葉が放つ甘い香りがながれてきた。そんなおり、結城のもとに一本の電話があつた。妻の咲江がそれを受け、北海道の高梨春樹さんという方からですと告げられたとき心臓が脈打ち、後ろめたい思いが胸をよぎつた。あれから半年が過ぎたのか。そう思いながら受話器をとつた。水気のない声が聞こえてきた。

「先生、いつぞやはお忙しいのに私の原稿を快く受け取つて下さりありがとうございます」

「ああ高梨君か、変わりはないのかい」

高梨は少しの沈黙のちハイと答えたが、しわがれた声をしぼるように言葉をついだ。

「今日は先生に教えを頂きたくて電話させてもらいまし

荒削りで技術的には大いにみがくべきところがあるにしても、並々ならぬ想像力と表現力がみなぎっており、今の自分にはないものだった。おそらく若干の校正を加えれば十分に一流の出版社からも引く手あまたになる可能性がある作品だった。その夜、明け方近くまで高梨の小説にのめりこんだ。

普通なら自分の教え子が優れた作品を書いたのであれば、進んでそれが世に出るようには手助けするのが教育者としての務めであろう。ところが結城慎一郎は、素直にそうは考えられなかつた。たゆまぬ努力を積んで高等教育を受け、研究に研究を重ねて教授になり、苦しみぬいて作品を生み出し、あるときは人脈に頼り、権威ある人にへつらうことまでしてやつと作家として認められるまでになつた。だが今の自分には次の作品を書く発想すら浮かんでこない。それなのに田舎に住むあの青年はいともたやすく傑作を生み出しているように見える。

結城はずつと歳の若い高梨春樹を、自分の名声や立場を脅かすかもしれない存在として捉えてしまったために東京に戻つてからも原稿を秘した。それを妻の咲江はおろか、訪ねて来るK出版の垂水にも話題にすることを避けた。しかし一方では、貪るように高梨の原稿をくりかえし読み耽つていた。気づいたときに外が明るくなつていたのは一度や二度ではない。結城は完璧にその作品の前に屈服させら

た」

結城は黙した。答えがないので高梨は遠慮がちに言葉をついだ。

「先生、どうだつたでしょう……私の書いたものはだめでしょうか」

「ああ、すまないね。忙しくてまだ少ししか読んでいないのだよ」

本当は貪り読んだのだ。だが、妙な自尊心がそういわせた。

「エッセイから幾つか読ませてもらったよ。なかなかいいじゃないか。技術を磨けばそれなりの作品になり得ると思うよ」

「そうですか、ありがとうございます。それで先生、僕の作品を出版社に投稿しようと思うのですがだめでしょうか」

「うん、そうだな。まだ少し早いかなあ、もつと作品を練り直さないといけない気がする。それに今どきの出版社は持ちこみ原稿を歓迎しない傾向にあるから投稿先をじっくり選んだほうがいい。ところで君は他にも書いたものがたくさんあると話していたね。来週から少し時間があるので本腰を入れて見てあげよう」

「ほんとですか？ すぐ送ります。すごく嬉しいです。結城先生のような方にそういつてもらえるなんて」

まもなく原稿が宅急便で送られてきた。小説やエッセイ、詩、それに評論などもあった。それは原稿用紙で三千枚はゆうに超えていると思われた。どれを読んでも、いったいいつこれほどの見識をあつた若者が身につけたのか結城は疑問に思うほどだった。彼はその原稿にのめりこんだ。開かれた扉を開け、その世界の芳香に酔った。結城慎一郎はこの時点でこの才能溢あふれた青年の唯一最大のファンであったが、同時に最悪の発見者でもあった。

その年の十二月に、ある教育団体が主催する集まりがあった。場所は小樽で、『雪あかり文芸対談』と題して、北海道にゆかりのある四人の作家たちによる対談形式のシンポジウムだった。

集まりの最後に聴衆参加のコーナーで結城の最近の文学的な変化について二人から質問が出た。脇の下にじつとりとした汗が流れるのを感じたが平静を装って答えた。

「自分でもよく分からないのですが、私の場合は文学的覚醒が雷に打たれたみたいに訪れたといえますか、月夜の森での神秘的な体験によるとでもいいですか、不思議な感覚には違いありません」

そんなつかみどころのない曖昧な言い方ではぐらかした結城は、長沼における高梨青年との出会いについてはいっさい触れなかった。

検査しましたところ、胃と十二指腸にかなり進んだ癌が見つかりましてね」

「癌ですか？ そんなに前から」

「それが分かってからは何度も入院しました。先生が長沼に講演に来られると聞いてあの子は病院を抜け出して行ったのです」

「そうだったのですか。それでどうなんです？ 容態のほうは」

「だめです——。すっかり弱ってしまつて。私はもう諦めました」

老母の言い方には、立ちほだかる非情な運命を自分に納得させるようなものがあった。結城は衝撃を受け、返す言葉がなかった。

「もう前から具合が悪かつたのになつと無理していたようです。なんせ私が歳なものですから、何もかも息子が一人でやつとりましたので、かわいそうなことをしました」

「そうですか……」

結城はどうにも慰めの言葉が出てこなかった。普段あれだけ文章を書き、大勢の前で流ちょうに話しているというのに、いざというときに適切な言葉を何ひとつ発しえないのが情けなかった。病院名を聞いて電話を切った。異様なほど顔色が黒ずみ、髪の毛が不自然に少なかった理由が今にして分かった。

その夜、ホテルのロビーから札幌の雪景色を眺めながら結城は考えた。高梨春樹はその後どうしているだろう。また何か新しいものを書いただろうか。だとすれば読みたいものだ。

そう思つて部屋に帰り、長沼の青年の家に電話を入れた。長い呼び出し音のあと年配の婦人が出た。

「私は結城と申します。春樹君の大学時代の」

「ああ！ 春樹がお世話になつた先生ですね？」

「そうです」

「わたしは春樹の母親ですが、息子が随分とお世話になつていたので、まことにありがとうございます」

結城は年老いた母親が心から息子の恩人として礼を言っているの、いたたまれない後ろめたさを感じた。

「いいえ、私は何もしておりません。立派な息子さんですね。春樹君はおいでですか？」

「いいえ、春樹は今おりません」

母親の声が異様なほどに沈みこんだ。

「春樹君がどうかしましたか？」

「実はあの子は入院しております」

「どこか悪いのですか？」

「はい息子はもう幾日も生きられんです」

「え？ 何でまた……」

「昨年の三月ごろでしたか、急にお腹が痛みだしまして、

「あんなに若いのに。なんということだ」

結城は明日の午前に東京へ帰る予定だった。午後からK出版の垂水が家に来て依頼されていた幾つかの原稿を渡す約束になつている。しかし今の電話で急きよ予定を変えることにした。距離はさほど遠くはない。搭乗を三時間ほどずらして長沼に行つてみようと思つた。

次の日、結城はホテルで朝食を早々に済ませ、タクシーで長沼M病院に向かった。国道を走りぬけ、ワダチができた街中を通つて午前十時ころ病院に着いた。二十年ほど前にできたという病棟は内部を改築している最中だった。ロビーには建材や塗料の匂いが漂っていた。

受付で面会を申し出た。規則なので午後からにして下さいといわれたが飛行機で帰らねばならない事情を話し病室に入る事ができた。四人部屋の窓ぎわに高梨はいた。体中に針や管が通され、眼は落ちくぼみ毛髪はほとんどなくなつていた。

わずか数ヶ月でこんなにも人は変わるものか。見るも辛い状況に結城は衝撃を隠せなかった。静かにそばに行き、声をかけるより先に青年の手を握つた。やはり言葉が思うように出ない。何をいっても白々しく聞こえる気がした。唇がかすかに震えるのを制して、かろうじて口を開いた。

「知らなかったよ、高梨君が病気で苦しんでいたとは。大



変だつたねえ、さぞ辛いだろう」

病人は泉の底から上を覗くような視線を結城におくり、水気のないかすれ声でとぎれとぎれに答えた。

「ありがたいございます。昨夜おふくろが来て、先生がいまして下さると教えてくれました。ほんとに嬉しいですよ」

「早く元氣になつてまた作品を書きたまえよ。君には才能があるのだから」

このとき、結城は本心からそういつた。あれほどの優れた小説を書く若い才能が今にも絶たれようとして、運命の理不盡きを感じた。自分がその才能に嫉妬し、預かつた原稿を封印していたことを恥ずかしく思つた。そのとき高梨の言葉がおごそかな響きを伴つて聞こえてきた。

「先生、たぶん僕はもう何ヶ月も生きられません。それで、お願いがあるのです」

「そんなことをいうものじゃない。今の医学はすごい速さで進んでいるのだから諦めないで養生することだよ」

「いいえ分かるのです。自分の命の灯が消えようとしているのはつきり見えるのです。戸口にはハデスの番人が立っています。ほら、すぐそこに」

壁を向いた視線は動かない。それは死の淵を覗いている詩人の眼差しだった。高梨は骨だらけの手を結城に乗せた。「先生、どうか僕のお願いを聞いていただけませんか」

枕もとには聖書が置かれていた。高梨は荒行を終えて悟

りを開いた宗教家みたいな表情を見せていた。

「何かね？ 何でもいいから話してごらん」

高梨はあらかじめ用意していたらしく、ベッドの横の物入れに点滴していない方の手を伸ばして幾つもの封筒を取り出した。重そうな様子が結城はすぐに手を貸さねばならなかつた。ベッドの横に積み上げた封筒にはびつしりとワンプロで打たれた原稿が入っていた。

「先生、これは僕が書いた残りのもの全部です。酪農しながら小説家になるのが夢でした。時期がきたら今の仕事をすっぱりと辞めて本格的に書いてみたいと思つていました。がもう無理みたいです。僕には、今は女房も子供もおりません。今いるのは七十をとくに過ぎた母だけです。僕が死んだらこの牧場は母の甥がやることになるでしょう。僕が生きてきて残せたものはこの原稿くらいです。先生のところに置いてもらえたら本望です」

「分かつたよ。君の望むとおりにしよう」

「ありがたいでございます。これで安心しました。書いてきてよかつたです。ずっと先生を尊敬していました。この原稿を僕の分身だと思つてどこか近くに、邪魔にならない場所にそつと置いてほしいのです」

途中から首を浮かせて話していた高梨の顔には安堵の表情がうかび、呼吸もやわらいでいた。語り終えてから大きな仕事完了したみたいにくつたりと肩をおとし枕に首を

横たえた。突然の面会が疲労をもたらしに違いない。結城は再び手を握り、また来るからと言つて部屋を出ようとした。

そのとき高梨はやせ細つた手を、目の前の空をつかむように差し出して結城の名を呼んだ。その引き止めるしぐさに結城は立ち止つた。だが高梨は口ごもつたまま鈍く輝いた瞳を床にふせた。

「高梨君、他にも何か頼みたいことがあるのではないかね？」

「いいえ、特にありません」

高梨はかすかに微笑して結城を見送つた。帰りの時間が迫つていた。窓の外には、待たせているタクシーの運転手が車から出て時間を気にするように腕時計に目をやつてから病棟を見つめていた。結城は後ろ髪を引かれる思いで車中の人となつた。

車窓の雪景色には目が行かなかつた。高梨青年が帰りがけに結城を呼び止めたのが氣になつていた。何かを伝えようとしたに違いない。それは託された原稿のことではなく、もつと他の、もしかしたら私生活にかかわることではないかという氣がした。

会話の最中にふれた小さなひと言が、それに関連して妙に耳に残つていた。僕には、今は女房も子供もおりません。いるのは母だけですと青年は話していた。今は、という言葉

葉を二度も出したからには、もしかして彼には、かつて妻と子供がいたのではないだろうか。だとすれば、それに関連した何かを話そうとした可能性がある。そう考えたとき、いつそ病院に戻ろうかという氣持が胸をかすめたが、車はすでに空港ターミナルのゲートをくぐつていた。

空港から結城は自宅に電話を入れた。日頃からけつしてくだけた話し方をしない咲江の丁寧さの中に冷やかさをたたえた声が聞こえてきた。

「あら、あなたでしたの、もう東京ですか」

「いや、これから飛行機に乗るところだ。ちよつと用事ができて帰りを遅らせたから」

「そうでしたの、何かあつたのですか？」

「ああ、大学時代の教え子が末期癌でね、見舞いに行つてきた」

「あら、それはお気の毒ですこと、教え子つてどなたかしら」

咲江が聞きかけたとき、結城はそれ以上質問させずにすぐに用件をもちだした。

「今日、午後の三時に垂水君が原稿を取りに来るから机の上に重ねてあるのを渡してくれないか。帰つてからでは間に合わないから」

「分かりました、渡しておきます。それとあなた、皆さん

に配る例のお土産を頼みますね。二十軒分は必要です。石倉製菓の高級チョコなら恥ずかしくないとします」

「今日はそんな余裕はないよ」

結城は怒気をこめて電話をきった。空港で買物をする時間がなかったわけではないが、とてもそんな気になれなかった。すぐにゲートインして搭乗口にむかった。まもなく飛び立った飛行機は真っ白い大地を南へと進んでいった。噴煙をはく駒ヶ岳が眼下を通り過ぎるまで結城は呆然と窓の外を見るときもなく眺めていた。

客室乗務員が飲み物を提供しはじめたとき、結城は塩気のあるオニオンスープを頼み、疲労した体にながしこんだ。足もとの靴の中には高梨春樹に託された原稿が入っている。とりだして読みはじめたが、ページをめくるにつれてその中にのめり込んだ。時間が過ぎるのも、自分が空の上にいることさえ忘れるほど、教え子の書いた小説は結城を独特の世界にひきこんだ。

ところがそのころ、運命のいたずらが始まっていた。夫がいない間に咲江は散らかった書齋を片づけていた。そのとき夫が出版社から依頼されていた幾つかの原稿と、夫が読んでいた高梨青年の原稿とを重ねてしまったのだ。高梨の原稿は大封筒に名前が記されてはいたが個々の作品そのものにはタイトル以外に彼の名前が書いてなかった。K出版の垂水が来たとき、咲江はうっかり夫の原稿に混ぜて

それを手渡ししてしまった。

#### 第四章

数日後の夜遅くに出版社の垂水が電話をかけてきた。妻から取り次がれたとき結城は思った。こんな時間に非常識な奴だ。

「何か急用でもあるのかね」

いつになくぶつきらぼうに應對した。大勢の話し声や、カラオケの歌声らしきものが漏れ聞こえる中から興奮した声が出た。

「先生やりましたねえ。すごいです」

「何のことだい」

結城は一瞬、自分が何か大きな賞にでも選ばれたのかと思ったがそうではなかった。

「先日受け取った原稿ですよ。素晴らしいじゃないですか。みごとに新境地を開かれましたね」

「どの作品かな？ 君がそんなに褒めてくれるなんて珍しいじゃないか」

「このあいだ受け取った『さざなみ』ですよ。あれは間違いない傑作です。編集長も手放して褒めてました」

「何だっつて？」

どうして高梨青年の原稿が混じっていたのか理由がのみ

こめないまま、結城はまくしたてるように話す垂水の言葉に受話器を持って立ちつくしていた。

「うちの編集長はめつたに人を褒めない人ですよ。それが絶賛ですから。あの心理描写と臨場感は先生の作品の中でも群を抜いているではありませんか。すごいひと言です」

結城は絶句したまま固まっていた。

「ねえ先生、聞いてらっしゃるのですか？ 結城先生」

「ああ聞いてるよ。しかしあの作品は、私の大学時代の……」

まだ話が終わりないうちに、垂水は酔いで舌をからませながら話し続けた。

「編集長が断言しました。春にでる二十周年の『文芸四季の風』の中心に据えるそうです。メインですよメイン。三百枚ぶつちぬぎです。僕はもう嬉しくて、いま友人と飲んでいたんですが、いてもたってもいられなくなりお知らせしたような訳です。遅くにすみません、どうもお休みなさい」

「お、おい君……」

すでに切れていた。結城は教え子の原稿であることをいそびれてしまった。とんでもない間違いが生じたものだ。妻が手違いで渡したに違いないと今さら気づいた。しかしそのとき心の隙間に自己保身からくる生暖かい風が入りこ

んだ。いまさら打ち明ければ自分の文体や作品の構成が高梨春樹の影響を受けていたのがばれてしまう。このままにしようか。しかし黙っていたら盗用になってしまう。末期癌で苦しんでいる青年の作品を盗用するなどあるまじき行為だ。

二つのせめぎあう考えの中で結城の逡巡は夜更けまで続いた。理性的になったかと思えば、闇を覗き込もうする恐ろしい自分がいた。出版社の垂水の言葉が、海洋で漁師を誘惑する女神サイレンの声さながら、甘い蜜をとまなつて聴こえてくるのだった。

結城はつぶやいていた。

「それにしても『文芸四季の風』のメインとはすごい。今まで自分の書いたものはせいぜい五十枚の短編がひっそり掲載される程度だったのに」

結城の顔に蒼ざめた光がどこからともなくさしていた。その怪しい輝きは深い陰影を作って闇に浮かんでいる。それは窓から差し込む月光のせいか、あるいは内部の淀んだ部分から吹き出た燐光によるものか知るものはいない。

その夜は寝苦しかった。思考を引きずったまま夢の中で高梨青年が現れた。雨に濡れた土に似た青黒い顔をして、じつところらを凝視している。その糾弾するような視線に結城は思わず叫んでいた。

「許してくれ。許して……」



隣のベッドに寝ていた咲江がびくりと動いた。太った体をこちらに向けているのが結城のおぼろげな視界に入った。「どうしたのです、あなた？」

気づくと頭部から背中にかけて汗が吹き出ていた。結城は額に貼りついた前髪をバジヤマの袖で拭いた。呼吸がひどく苦しい。水に数分顔を漬けていたみたいに喘いでしまふ。

「あなたさつきから何度も苦しうに声を出してしまいましたよ。悪い夢でも見たのですか？」

「何かいってたか？」

「よくは分かりませんが、しきりに誰かに謝っていたみたいです。何かあったのですか？」

結城は見られたくない箱のふたを閉じ、すばやく話をすり替えた。

「夢の中で人を殺してしまった」

「まあ恐ろしい、まさか私じゃないでしょうね」

「知らない人だ」

「なんでそんな夢を」

「車ではねてしまったのさ」

「あから、夢でよかったこと。運転に気をつけてくださいよ、何かの知らせかもしれませんから」

「分かっているさ」

朝になつても悪夢の余韻は消えなかった。朝食が喉を通

を配列し、新たに池を造らせ、珍しいランチュウを泳がせた。地下室には個人の家とは思えないほどの立派なワインセラーをこしらえた。派手好みの妻は自宅や別荘にしばしば知人を招待しては得意顔で大盤振る舞いをしていた。結城はその多額の出費に追い立てられるように走り回っていたというのが実態なのだ。

不快なため息がたて続けに出る。胃の中から逆流するものがあり、食べてもいないのに腐ったニラのような匂いがある。結城は嘔吐感をこらえながら河畔にたたずみ、自宅の見える方向をふりむいた。目の奥が痛むほどに、仇を見ような鋭い視線で自分の家を見ていた。

「こんな生活を続けていけば才能も意欲も枯れてしまうはずだ」

いつの間にか粉雪が降っていた。息で冷えた手を温める。今年の冬は例年に比べて寒さが一段と厳しいという。雪国で水道の凍結が例年の三倍にも達しており、コンクリートが割れたりモルタルの煙突が破裂したりしたと報道されていた。結城はクシャミを繰り返した。ジャケットの襟を立て、背中を丸めて凍えてきた体を家に向かわせた。

自宅の門前にタクシーが停まっていた。派手なゴールドのイヤリングをつけ、毛皮で着飾った咲江と玄関前ですれ違った。一見して政治家の妻かと思うほどの堂々たる風貌だ。宝石の展示会があるから出かけてくるかといつて咲江は

らないままコーヒーをひとくち飲んでから自宅を出た。厚いズボンとニットのジャケットをはおっているが外は刺すように風が冷たい。そんな寒さをものともせず、多摩川沿いは朝野球の若者たちが河原を走りまわっている。犬を連れた人々や学生たちとすれ違う。それらが現実感をともなわずに視界を過ぎていった。

突きつけられたナイフの前で決定を迫られている。不可解な圧力が朝から自分を追い詰めていた。頭を冷やすために、冷たい冬の風に当たってみるのもいいだろう。そう思つて散歩に出たのだ。この多摩川沿いと橋を渡つてすぐの川崎を舞台にした小説を書いて賞をとつたのはいつだったろう。三十代の後半であったことはもちろん忘れていないが、それがあまりにも遠い過去に思われた。

「あのころは泉のように書くことが次から次へと浮かんできたものだが……」

言葉にならない声で結城はつぶやいていた。今更ながら自分の書く能力や才能が枯渇しているのを感じた。考えてみればそれもそのはずである。一回の講演で数十万円の謝礼を受け取り、毎月二〜三回こなすだけでかなりの稼ぎになる。ベストセラーになるわけでもない本を書いているより確実な収入になるのだ。

今年の春、妻にせがまれて軽井沢に別荘も買った。多摩川を見下ろす自宅の大きな庭に、さまざま高価な石や樹

肩をゆすり、肥満した腰をねじつて車に乗りこんだ。

結城は家に入ってからテーブルに置いてあった食パンを少しかじつたが、胸のむかつきが取れないので食べるのをやめた。ポットから熱い湯をマグカップにそそいで寝室に入った。ながしこんだ白湯が喉から食道を通るとき、急に震えがきて再び床にもぐつた。そのまま時間が過ぎたか分からない。虚脱と疲労と無気力がずっと結城をとらえて離さなかった。

日中まどろんでいたせいもあり、その日の夜は不眠に悩まされた。眠らねばならないと思うほど余計に力が入り、頭のでつぺんがますます覚醒してくる。明日は早くから処理すべき仕事が増えているし、数日後にひかえた仙台講演の準備もしなければならない。

妻が寝静まった真夜中に三階の窓辺に立った。月が煌々と照らす夜だった。知らない間に積もった雪に蒼い光が当たり、外の冷たさを一層際立たせている。その鈍い輝きとは対照的に、影になっている部分の暗さといつたらなかった。多摩川は恐ろしい蛇体となつて黒い不気味な淵をなしていた。対岸の土手や、鉄橋の下部がこれ以上の暗さがあるのかといつほど深い闇をつくりだし、家の庭石のシルエットに連なっていた。

画家がもしこの場面を絵にするとしたらどうするだろう。月光で鈍く輝く部分に点描のように淡い白をのせ、影の部

分には、最高度に暗い、少し青が混じった黒を用いるに違いない。外からは何の音も伝わってこない。耳もとは、ときおり聞こえる妻の寝息と、隣の部屋にある小型冷蔵庫が地虫のような鈍い音をたてていた。

冷やかな景色を見ながら結城は考え巡らした。研ぎ澄まされた月の光と、その影が醸し出す深い闇に呼応するかのようには心の淵から誰かのつぶやきが聴こえてくる。

「あの原稿の存在はまだ誰にも知られていない。あの青年の母親も目がほとんど見えないうちからは、おそらく読んではいないだろう。青年の命はもう時間の問題だ。本人が死んだらどうなる。お前の手もとにあるこの膨大な量の原稿は黙ってさえいれればお前のものになるのだ。誰にも分るはずはないではないか」

しかし別な声が前者に挑みかけた。

「いったい何を考えているのだ。恥を知れ。他人の作品をしかもおまえの教え子ではないか。お前まえを尊敬し憧れてもいるといっていたではないか。豊かな才能に恵まれながら若くして末期癌に冒されている不運な青年が哀れだとは思わないのか。人でなしが……」

二つの声の狭間で逡巡しながら、結城の視線は月光の影が作りだす暗黒の一点に注がれていた。無言のまま断片的に言葉が駆け巡る。俺はもう若くはない。今のままならチャンスも力もないだろう。同期の村上はあれほど脚光を浴

びている。かつてのライバルは遠いかなたに行ってしまった。どんなに焦ったところで開いてしまった差は取り返しようがないほどになっている。

被害妄想的な屈辱感はずり付きまわっていた。本屋大賞をとった翌年に村上は谷崎賞を手中にした。祝賀会を知らせるハガキを見ながら結城は歯がみしていた。あらゆる場所で人気の違いを見せつけられる。宮崎で文学シンポジウムが開かれたとき、五人いた作家の中でも質問や話題のほとんどが村上に集中していた。

「くそ、今に見ている。みんなをあつといわせてやる」

言い放ったまま顎がこわばり歯ぎしりしていた。耳もとですぐに別な声が現れる。

「そんなバカなことを考えるのはやめろ」

葛藤はいつまでも続いた。ずっと後になつてから、結城はこの夜のことを、深い後悔をもって何度も思い出した。

この日くりかえし浮かんできた想念の闘いを自分は早く止めるべきだった。さつさと悪い考えを払いのけるべきだった。だがそれを続けていたために醜悪な考えが心に根をおろしたのだ。やがてそれは自分の中で陰鬱に成長を始める萌芽となった。自らの運命はこの冬の月夜の暗い影の下で決まってしまったに違いないのだと。

朝を迎えても夕べの寝つきの悪さがたたって起きられなかった。脱力感で体が異常に重い。後頭部にどん音が走る。

朦朧とした頭を片手で押さえながら手洗いに立ったときは午前十時をまわっていた。ふらついた足で階段を下りてリビングに入ると咲江がさも奇妙なものを見るような視線を投げかけてきた。

「あなたどうしたのです？ お顔が……」  
「顔がなんだ？」  
「ひどく大きなクマが出来ているし、目も血管が切れて真っ赤じゃないですか。病院に行ったほうがいいですよ」  
「別にどうもしないさ。疲れて頭が重いのは確かだが、静かにしていたら直るだろう」

そうはいったが、洗面所で自分の顔を鏡で映したときは衝撃を受けた。眼の白い部分がほとんどなく、激しく殴打されたように血管が切れている。周囲の皮膚は薄墨を塗ったみたいに黒く青ざめ、眉間にくつきりとした皺が彫りこまれていて唇が引きつっている。人の顔は一日でどうも変わるものか。結城は恐怖を覚えた。その顔は目をそむけたくなるほど醜悪だった。

屈みこんで殴るように顔を洗い、充血を取るための目薬を何滴もさした。まぶたの裏に痛みが走る。ねばついたものが目尻から溢れた。それをティッシュペーパーでぬぐってからレンジで温めた蒸しタオルを顔に当てて眉間にできた皺を取ろうとしたとき電話が鳴った。K出版の垂水からだという。出たくなかったが、咲江がすでに移動用の受話

器を目の前に差し出していた。

「結城先生、今日午後からお時間を少し頂けませんか？」  
「何かね？」  
「夕べの件です」

一瞬記憶が飛んでいた。

「編集長が『さざなみ』のことで打ち合わせをしたいそうです。なんとって創刊二十周年のメインですから、相当に力が入ってるみたいです」  
「……………」

「先生、聞いてらっしゃるんですか？」

「ああ聞いているさ」

「あんまり嬉しくないみたいですね。まあ、そこが結城先生らしいと僕は思いますけどね」

「いま少し考えたいことがあるから、その件は待つてくれないか」

「考えることないじゃないですか。特集号のメインと云えば、先回は今やノーベル賞候補にまわっている村上嘉門ですよ。まして今回は二十周年記念号ですからね、かなりのインパクトですよ。先生もいつきに文壇のトップに躍り出る絶好のチャンスじゃないですか。もう十年以上も先生の担当をさせていた、だいたい僕としてもこんな名誉はありません」

「あなたの気持はありがたいが、どうしても校正したいと

「ころもあるし」

「そんな仕事はうちの奴らにまかせておけばいいですよ、専門家なんですから」

「そうだろうが、今回の作品には自分なりに思い入れがある。もう少し待ってくれ」

「そうですか……。まあ待ちますが、今月中にお願ひしますよ」

「ああ、分かったよ」

垂水の話に、真夜中に思い浮かべて歯ざりりまでした村上嘉門の名前が出たとき、結城は自らの胸のうちに冷たく青い炎がめらめらと燃えるのを感じた。

あいつに勝つチャンスかもしれない――。

闘病中の高梨春樹が亡くなったという知らせを受けたとき結城は弘前にいた。地元で文学サークルに講師として呼ばれていて四日目を終えて宿泊先のホテルに帰ったときカバンの中の携帯が振動した。東京にいる咲江からで、今朝早くに息を引き取ったことを知った。明日が通夜であり、告別式は明後日、という。

「やはりだめだったか」

結城は力なく壁に向かってつぶやいた。それにしてもこれほど早いとは。高梨と最後に会ってからひと月にもならない。明日の通夜に行こうか。いや行かねばならない。手

帳を開き、その後に予定されている二日間の約束を調整した。翌日は早々に弘前から北海道に飛んだ。

通夜には近隣の酪農関係者や農協の人々が弔問に来ていた。結城の目は若い高梨春樹の遺影に注がれた。そこには蒼ざめた土色の顔はなく、学生のときに見た、ふつくらとした柔和な表情があった。その澄みきった純粋な若者の目に結城は射すくめられ、暴かれた邪心を隠すように視線をそらした。

親族席には数人の姿しかなかった。打ちひしがれた老母の傍らに、三十を少し超えたくらいの、ほっそりとした体つきの人が隠れるように座っていた。それは肩まで垂れた黒髪が美しい女で、周りにいる誰よりもその表情に暗い影をたたえていた。その横に絡みつくようにして三歳くらいの愛らしい女の子が、しきりに大きな黒目を動かして参列者の顔を順番に見ていた。小さな唇が熟れたサクランボのように赤い。

その大きな瞳を見たとき結城はひらめいた。もしかしたら、あの親子は高梨春樹と関わりがあったのではないだろうか。死ぬ前に声を絞り出して語っていた言葉が思いだされた。僕には今は女房も子供もおりません――。もししたららという思いから受付にいた男性にそれとなく尋ねてみた。

「前にいる若い女性はどなたですか？」

「あの人は故人の別れた奥さんですよ。女の子は娘さんです」

やはりそうだったか。結城が感慨深げに見つめていると、受付の男は訊きもしないのに話をついだ。

「都会で育った高梨君の奥さんは、農村での生活に耐えかねてあの子を連れて出ていってしまったのです」

周りに人がいなかったせいも、男は話をつづけ、今は美家のある旭川にいるはずだと述べた。その言い方には明らかに非難の感情が込められていた。

結城は男の話に耳を傾けながら若い母娘から目を離さなかった。母親の膝にまとわりついている女の子が何とも愛らしかった。目もとに見られる利発な表情には亡くなった高梨の面影が色濃く偲ばれた。焼香を済ませ、老母にお悔やみを述べてから、結城はとんぼ返りで東京へ帰った。

三月号の『文芸四季の風』は二十周年特別号というわけだ、通常のものより厚く、執筆陣もそうそうたる顔ぶれだった。その中で『さざなみ』が堂々とメインを飾った。出版界での評価も高く、新聞の書評でも「今や死語となりつつある純文学の分野で新境地を開くものであり、今までの結城氏の作品の中にあつては群を抜く出来栄である」と書かれたりした。

彼はその作品で夏までに由緒ある幾つかの賞を受けた。

どの授賞式にも本人が出席することはなかった。しかし人々はそのことを変に思うどころか、結城慎一郎という作家がそうした表立った派手な場所を好まないことにますます好感を抱いてしまうのだった。

その人気はいやおうなく高まり、出版や取材の依頼がさつと増した。祝福の電話や手紙、メールがどつと押し寄せた。その中には村上嘉門からのものもあった。学生時代のころとまったく変わらない屈託のない言葉で祝福を述べ、近々会って祝杯をあげようとまで言ってくれた。

その年の終わりに、出版社からの矢のような催促に押されるかたちで、彼は新しい本を出した。それは『消えた足跡』と題する元陸軍将校が犯した殺人をとりあげたもので、やはりベストセラーになった。五つの映画会社からオファーがきて映画化の話も進んだ。

三年ほど月日は流れたが、その間に浜松でひっそりと暮らしていた結城の母である民子が世を去った。結城慎一郎は文壇でのゆるぎない地位を築いていた。また、彼自身が書いた生態学と環境に関する論文も、国内はおろか英語に訳されて海外でも評判となった。文壇の登竜門として知られる賞の審査委員も勤めるようになったし、快進撃はそれだけにとどまらず、日本ペンクラブの副会長にという打診があった。結城はさすがにこの仕事を受ける気にはなれなかった。再三の誘いを辞退した。（五章へ続く）